『東京大学言語学論集』**44** (2022.10) e63-e79

プロセスの制止・転換という観点からみた「まあ」の意味[1]

熊切　拓
takukumakiri@icloud.com

キーワード：日本語　談話標識　フィラー　意味論

要旨

本稿は現代日本語の「まあ」を取り上げ、先行研究を検討したのち、「まあ」の意味について以下の主張を行う。「まあ」の使用は、話し手と他者がともに関与し、なおかつ発話に先立って進行しているあるプロセスが存在すること、そして、話し手がそのプロセスを打ち切るような新たなプロセスを開始することを示す。「まあ」がかかわるプロセスには4つのタイプがあり、そのタイプによって「まあ」の意味は「なだめ」「ぼかし」「断定」「談話の転換」に分類できる。

1. はじめに

現代日本語の「まあ」の意味については、日本語研究において長らく議論の対象となってきた。それは、ひとつには現代日本語の談話でこの「まあ」が多用されているということにより、もうひとつにはその用法の多様さゆえに、その意味を統一的にとらえることが困難であることにもよる。さらに、日本語教育研究においても「まあ」はしばしば議論されている。これは、「まあ」の適切な使用が、日本語の自然な運用にかかわるからである。本稿では、日本語研究および日本語教育研究において関心を集めているこの「まあ」に関して、先行研究を踏まえて、統一的な意味解釈を提示するものである。

2.「まあ」の主な用法

まず「まあ」の主な用法[2]を概観する（該当する「まあ」は下線で示す）。

(1)　「PETCT の結果はどうなんですか？」と聞くと、「<u>まあ</u>、待てや」と[3]。

(2)　<u>まあ</u>、大丈夫だよ。　（柳澤・馮 2021a: 11）

---

[1] 本稿は、2020 年 1 月 27 日、東京福祉大学において、同大学の日本語担当教員有志の研究会において行った口頭発表「個人的な断定を表す「まあ」について」を発展させたものである。発表にさいしてコメントをくださった方々に感謝を申し上げる。また初稿に丁寧なコメントをくださった西村義樹先生、田中太一さん、佐藤らなさんにもお礼申し上げる。

[2] 「まあ、きれい」「まあ、かわいい」「おやまあ」といった驚きを表す「感動詞」の「まあ」もあるが、この「まあ」は「主にドラマ・漫画の『お嬢様』的キャラクタ」（大工原 2020: 130）、あるいは典型的には「年長の上品な女性」（柳澤・馮 2021b: 237）が使用するとされ、少なくとも現代語においては「役割語」的な側面が強いため、本稿ではひとまず除外して考える。

[3] 「『まあ、これでしばらくは生きれるなあ』－胸膜中皮腫患者の前向き一辺倒－闘病記〜死ぬまで元気です／44（右田孝雄）」https://koshc.jp/archives/6960（2022 年 7 月 8 日閲覧）。

(3) ここまで8勝1敗。開幕から3カード連続で勝ち越し、6連勝といい波に乗り、5日から敵地・マツダスタジアムで2ゲーム差の2位・広島と戦う。首位攻防戦だが、原監督はそこは意識していない。「まあ、初戦ということよね。1 カード目のね」。広島との初対決というフレッシュな気持ちで向かう[4]。

(4) ま、それで、ぶっちゃけあんまり別にホテル（人が）いなかったんですけども、まあまあ、でも、それでもまあまあ、プライベートプールみたいなの付いてましてね、すごかったです、ほんでまああの夕方（みんなが）来て……[5]

(1) は検査の結果を知りたがる筆者を制止しており、「なだめ」の用法とも言われる。(2) の「まあ」は、留保付きで「大丈夫だ」ということを述べるもので、先行研究で概言や発話の和らげなどさまざまな解釈がなされている。(3) の「まあ」は「首位攻防戦であるが、自分の気持ちとしては『初戦』である」と述べるものであり、(2) の留保とは異なり、ある一般的な見解（「首位攻防戦であること」）に対して、話し手個人の判断（「初戦であること」）を述べるものである。(4) には複数の「まあ」があるが、ここで取り上げるのは最後に現れる「（ほんで）まあ」である。この「まあ」は「談話の区切り」や「話題の導入」といったような談話の構造に関わる機能を果たしていると考えられる。

このように、「まあ」の用法にはさまざまなものが含まれ、これが「まあ」の意味記述を難しくしている。

また、「まあ」の文法カテゴリーについての見解もさまざまである。(1) 〜 (4) の「まあ」全体を談話にかかわる標識、談話標識ととらえるもの（川上 1993, 1994）、フィラーととらえるもの（魏 2015、柳澤・馮 2021a, 柳澤・馮 2021b）がある。(1) と (2) を文副詞と捉え、(4) のような談話構造にかかわるものをフィラーとする立場もある（川田 2007b、小出 2009）。そのいっぽう、フィラーとしての「まあ」を認めず、あくまでも副詞とする研究（大工原 2010）もある。

このように研究者によって「まあ」の文法カテゴリーがさまざまなのも、それぞれの用法において「まあ」の役割が異なっているからである。本稿では、こうした「まあ」の役割の違いを、「まあ」の機能する局面の違いとしてとらえ、それぞれの局面では共通した機能を持つことを明らかにする。すなわち、統一的な「まあ」の意味があり、それが用いられる局面によってそれぞれ特徴的な用法が生まれる、ということである。

3. 「まあ」の意味についての先行研究とその問題点

本節では、「まあ」の意味解釈の多数派である「留保説」と、それに鋭く対立する「優越性」説をそれぞれまとめたうえで、どちらにも問題があることを示す。さらに、双方の立場では十

[4] 「【巨人】開幕ダッシュ決めた原監督『まあ一回りを行ってこいしてだよね』じっくり戦う構え」（中日スポーツ、2022 年 4 月 5 日）。https://www.chunichi.co.jp/article/447375（2022 年 7 月 8 日閲覧）。

[5] 「チョコプラのラ＃235 沖縄ロケ」（Youtube チョコレートプラネットチャンネル、2022 年 6 月 29 日）。https://www.youtube.com/watch?v=pLJjcEOjuQA（2022 年 7 月 8 日閲覧）。

分に扱われていない「まあ」の用法があると指摘する先行研究（大工原 2010）を取り上げ、その重要性について確認する。最後に、上記のいずれの研究の立場とも異なる意味解釈（金 2017）の可能性を検討する。

3.1. 「留保」説

「まあ」は、それに続く発話を和らげたり、曖昧にぼかしたり、なんらかの点で留保がついていることを示したりする機能を持つものとして、しばしば記述されてきた。このような見解をここではひとまず「留保」説と呼ぶことにする。代表的な例は (2) である。主な研究として、川上（1993, 1994）、冨樫（2002）、川田（2007a, 2007b）、小出（2009）、大工原（2010）、魏（2015）がある。

「まあ」の研究における基本文献のひとつである川上（1993, 1994）は、「まあ」を「いろいろ問題はあるにしても、ここではひとまず大まかにひきくくって述べる」という「概言」としてとらえ、ここから「まあ」のもつ曖昧性や、相手への配慮が生じる、としている。

冨樫（2002）は、以下の (5) のような例を手がかりに、「まあ」の機能を「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す。あるいは、計算に至る際の前提そのものが明確ではないことを示す」とまとめた。

(5) 1980 円に消費税だから、まあ、2100 円くらいかな。（冨樫 2002: 16）

川田（2007a）では「まあ」を「情動的感動詞」「ヘッジ」「フィラー」の 3 種の「まあ」に分類し、ヘッジの「まあ」を「発話行為の程度を和らげる」ものととらえる。さらに、川田（2007b）では「まあ」の「発話の和らげ」をスケールの観点から分析し、その意味を次のようにまとめた。

(6) a. 「まあ」が、ある要素に付加されることによって、その要素の持つスケールの上限が明示される。
b. その結果、「多く見積もって…」のような解釈を聞き手に促す。（川田 2007b: 44）

具体的には次のような例において「まあ」は、聞き手に対し、「明るいがまぶしくはない」という明るさの程度の点で上限のある推意を生じさせるとする。

(7) X：君の部屋は明るい？
Y：まあ、明るいよ。（川田 2007b: 43-44 の例にもとづく）

「まあ」のこのようなスケール作用性は、話し手の確信の度合いにもかかわり、それが、「概言」や「曖昧性」という機能につながるとしている。

川上の「概言」に似た解釈を行うのが小出（2009）と大工原（2010）である。小出（2009）は副詞としての「まあ」の意味を次のようにとらえる。

(8) a. そこに叙述された内容は，当該事態について存在するいくつかの可能な判断や評価の中からの選択されたものであることを示す。
b. その選択は，必ずしも最善ではない，あるいは，厳密なものではなく暫定的なものに過ぎないということを示す。（小出 2009: 19）

ここで述べられる「選択の暫定性」は「ひとまず大まかにひきくくって述べる」概言と通じ合うものである。

この暫定性はまた、話者の「内心のわだかまり」の表れとも見ることができる。大工原（2010）のいう「まあ」の「但し書き的用法」はこの「内心のわだかまり」に焦点がある用法だという（大工原の「強調的用法」については 3.4.節で扱う）。具体的には次の (9) では、「細かいことを言えば、長野や岩手などの他のリンゴの名産地もあるけど」という話者の「内心のわだかまり」がほのめかされているという。

(9) 日本で、リンゴといったら、まあ青森ですよ。（大工原 2010: 128）

また、待遇表現の観点から「まあ」を分析した魏（2015）は「まあ」の基本的な意味を「評価、主張、見解、判断、説明などを慎重に、謙遜して述べる」とし、日本語教育の観点から日本語の談話標識を研究した Lukamto（2012: 43）も、「話し手は尊大に聞こえないようにするために「まあ」を使っている」と述べる。これらの解釈もまた、「まあ」の概言という意味や曖昧性に関連づけることができよう[6]。

上記の諸研究をまとめると、「まあ」の意味は「概言」「曖昧性」「和らげ」「暫定性」「内心のわだかまり」「慎重さ」「謙遜」というように、発話内容になんらかの留保をつけるものとしてとらえることができる。

3.2. 「優越性」説

いっぽう、この「留保」とは異なる見方もある。柳澤・馮（2019, 2021a, 2021b）の一連の研究である。

柳澤・馮は「まあ」の使用が「尊大な印象」を与え「発話内容に対する自信の欠如を表現しないこと」（柳澤・馮 2019）、謙譲語と共起すると「相手を見下したような強いマイナスの印象」を生むこと（柳澤・馮 2021a）に着目した。次の例は「まあ」と謙譲語が共起した場合であり、「実際に発することはない」例であると、柳澤・馮は述べる。

[6] 加藤（2001）は「まあ」をテーマとしたものではないが、「まあ」には「やや躊躇や逡巡を伴う発話であることを伝える機能」があるとしている。これもまた、はっきりと言い切らないという点で概言に似ている。

(10) ×まあ、説明させていただきます。　（謙譲語との衝突、柳澤・馮 2021b: 235）

そして、柳澤・馮（2021b）ではさらに分析を深め、「まあ」には意味がなく、ただ話し手がなんらかの「優越性」を感じた時に出現できる語であると、結論づける。その「優越性」として 3 つのものを挙げている。①「社会的優越性」(「まあ」が上位の者に対して使いにくいことから)、②「情報の優越性」(「まあ」が話し手の体験を語る時に現れやすいことから)、③「思考による優越性」(「価値観、興味関心の対象、意識を向ける対象といった思考の前提に差がある場合」)。この「思考による優越性」とはたとえば次のような例に見られるものである。

(11) A：おい、向こうに見える黒い塊は熊じゃないか。
B：まあ、熊でも鹿でもいいから、急がないと夜になるぞ。　（柳澤・馮 2021b: 236）

(11) においては「B は〈到着時間〉という緊急性の高いものに意識があり、A の関心事である〈黒い塊の正体〉には興味がない」とし、この発言の前提の違いが、ここでは「まあ」の出現条件となっていると考えるのである。

3.3. 「留保」説と「優越性」説の問題点

「留保」説は、「まあ」が話し手の発話内容になんらかの留保をつけるものであり、これが曖昧性や話し手への配慮に結びついていた。こうした見解からは、柳澤・馮（2021b）のいう「まあ」の出現条件である「優越性」、とりわけ、「まあ」が上位の者に対して使いにくいということの説明は難しいように考えられる。これは「留保」説の欠点であると言えよう。

しかし、柳澤・馮の「優越性」説にも、問題点がある。

すでに述べたように、柳澤・馮（2021b: 240）は「まあ」は 3 つの「優越性」という「出現条件のみを持ち、意味を持たない語である」ととらえる。しかし、意味を持たない語であるならば、「まあ」という音形である必要はないはずである。だが、必ず「まあ」でなくてはいけないということは、「まあ」がこの「優越性」という条件に合致するような何かしらの意味を持っていなくてはならない。この点で、「まあ」の意味を論ずる余地はある。

「留保」説と「優越性」説のそれぞれの問題点について述べたが、この双方に共通する問題点もある。それは、大工原（2010）のいう「まあ」の「強調的用法」を適切に扱うことができないことである。

3.4. 「強調的用法」（大工原 2010）、および断定の「まあ」

「まあ」が強い断定を表すことはかねてから指摘されていたが、これを取り上げて主要な用法のひとつとして記述したのは大工原（2010）である。

大工原（2010）は、副詞的な用法の「まあ」を「但し書き的用法」と「強調的用法」に区別し、次のようにその違いを明らかにした。

(12) a. 日本で、リンゴといったら、まあ青森ですよ。
　　b. 日本で、リンゴといったら、まぁー青森ですよ。　　（大工原 2010: 128）

(12a) は (9) として挙げたものであるが、ここでは「細かいことを言えば、長野や岩手などの他のリンゴの名産地もあるけど」という話者の内心のわだかまりが「まあ」によって表されているとする（すなわち、これは 3.1 節の「留保」説の捉え方である）。これに対し (12b) の「まぁー」は「低高の音調で延伸を伴って発音された場合、内心のわだかまりに関する含意はなく、むしろ「ともかく青森だ」という強い主張に解釈」されるという（大工原 2010: 128）。

この「強調的用法」は大工原によれば、ある事柄を「体験談として回顧的に語る」（ibid. 2010: 159）さいに用いられ「話し手が内心のわだかまりには全くこだわらず、それを切り捨てる」用法である。この場合、つねに「まぁー」という形が現れるわけではなく、「但し書き用法」と区別のつく場合には「まあ」も現れうる。

(13) あの芝居のまあおもしろくないこと。　（大工原 2010: 157、原文では「まあ」はカタカナ）

この「強調的用法」とは異なるが、「まあ」が留保ではなく断定を表す場合はしばしば見られる。(3) の「まあ」も「首位攻防戦であるが、自分の気持ちとしては『初戦』である」と断定するものである。また (4) の「まあまあ、でも、それでもまあまあ、プライベートプールみたいなの付いてましてね、すごかったです」もまた、「ホテルには人が少なかったが、それでも、プライベートプールが付いていて、すごかった」と話し手の感想を断定的に述べている。

この「強調的用法」と「但し書き的用法」との違いだが、大工原（2010: 137）の説明によれば、「但し書き的用法とは「内心にわだかまりがあるが、それにはこだわらない」という記述のうち、前件「内心にわだかまりがある」により焦点があり、強調的用法とは、後件「それにはこだわらない」により焦点がある」という。

これは、強調的用法では、こだわらないとはいうものの少なくとも「内心のわだかまり」が存在すると理解できる。しかし、その「内心のわだかまり」が、(12b) や (13) ではどのようなものであるかは必ずしも明白ではないように思われる。また (3) でも「首位攻防戦ではあるが」という前提に対して「そうではなく、自分にとっては初戦ということ」という話し手の判定が下され、(4) でも「ホテルには人が少ない（ゆえに寂しい）」という状況に対して「まあ」を介して「いや、すごかった」という話し手の感想が述べられているが、この 2 例から「内心のわだかまり」を読み取ることは難しい。

それゆえ、大工原（2010）が「内心のわだかまりに関する含意」がないとする「強調的用法」や、断定を表す用法は、「但し書き的用法」と同じように「内心のわだかまり」では解釈できない。

断定の「まあ」については「優越性」説も言及している。たとえば、次のような例である。

(14) 狩野派であることには間違いないが、まあ、幕末か明治の作品だろう。

（柳澤・馮 2021b: 239）

柳澤・馮は、(14) には「とりあえずの判断」といった印象はなく、「話者の自信や慎重さ」が感じられるとしている。それは、古美術の鑑定には「多くの専門知識を必要とする」ため、「まあ」の出現条件である優越性がストレートに含意されるからだという。つまり、話し手の優越性が高い場合には、留保の意味が表示されないということになるが、この考えは、話し手に専門的な知識を前提することのできない (4) の断定的な「まあ」の用法にはあてはまらない。また、(3) は確かに専門家の発言であるが、その内容は「首位攻防戦」というよりも「初戦」であるという捉え方の違いを述べるもので、これは必ずしも専門的な知識が必要な判断とは言えない。それゆえ、優越性という解釈では説明できない例もあると言えよう。

3.5. 進行を止める「まあ」

日本語の「まあ」と韓国語「뭐」という２つのフィラーの対照を行った金（2017）では、「まあ」には「進行を止める」機能がある、というこれまでにはない見解が提出されている。金は「まあ」のプロトタイプ的用法として (1) のような「なだめの用法」を考え、そこから「まあ」を「とりあえずの代替案を提出するために、進行するものを止めること」と記述する。

興味深いのは、この見解が談話にかかわる「まあ」をよく説明することである。金は小出（2009）に依拠して、談話における「まあ」の 4 つの用法[7]を取り上げ、そのそれぞれについて例を挙げ、その解釈を述べているが、注目すべきは注釈、例示、見解表示の「まあ」である。

(15) 注釈の「まあ」

語用論では、聞き手による inference、まあ、解釈、の過程を解明することが 重要なわけです。（大工原 2010:149）

(16) 例示の「まあ」

〈アメリカにいたころの暇な時間の過ごし方を聞かれて〉

アメリカではあのー、まあ、友人とあったりとか、まあ本を読んだりとか、まあ、映画を見たりとか…（金　2017: 46、小出 2009:19 にもとづく）

(17) 見解表示の「まあ」

学生を対象にした調査でも、恋人がいるのが約 3 割という結果が出ていて、今回の調査結果も、まあこれくらいだろうと感じた。（金　2017: 47）

注釈の「まあ」の (15) では、注釈として inference の訳語を挿入するために、「発話内容」の進行を「まあ」で止めている。例示の「まあ」の (16) では、「まあ」によって発話の「進行

[7] 小出（2009）にはフィラーとしての用法が 6 つ記載されており、そのうち「d. 発話ポイント表示の「まあ」」と「f. 談話の区切りを示す「まあ」」は、金（2017）では扱われてはいない。

を止め」、例を導入している。(17) は見解表示の「まあ」で、「まあ」によって発話の進行を止め、話し手は自身の意見を述べている。

このように金（2017）は、「まあ」が発話の進行を止め、注釈・例示・見解表示が行われる、と考える。

冒頭に挙げた (4) の「(ほんで) まあ」について、「談話の区切り」や「話題の導入」としたが、これも「進行を止める」「まあ」の用法として理解ができそうである。

問題は、金（2017）では発話の進行に関わる「まあ」のみが扱われ、(2) や (3) のような副詞的な「まあ」については議論がなされていない点である。本稿では「まあ」の「進行を止める」という解釈が、「まあ」全体の用法に適用できるものと主張する。

3.6. 本節のまとめ

本節では先行研究を検討し、「留保」説と「優越性」説という対立する見解があり、そのどちらにも問題があることを指摘した。「留保」説には、「優越性」説の着目する「まあ」の尊大さを説明しえないという問題点がある。「優越性」説の問題点は、「まあ」が、その出現条件である「優越性」とどう関わるのか、ということについては答えを与えていない、ということである。

また、この 2 つの説には共通した問題点がある。それは両者とも「強調的用法」もしくは断定的な「まあ」の用法を十分には扱いきれないという問題である。この「強調的用法」についてはじめて詳細に論じた大工原（2010）は、「内心のわだかまり（に焦点が当てられていない）」という観点から説明しようとしているが、これは必ずしも成功しているとは言えない。

そして、金（2017）の進行を止めることによって変える「まあ」という見解は、談話の「まあ」の用法をよく説明するように思われるが、それ以外の「まあ」の用法については言及がなされていない。

それゆえ、「留保」説、「優越性」説、そして大工原（2010）の「強調的用法」の解釈、金（2017）の進行を止めることによって変える「まあ」という見解のいずれも、「まあ」の意味を統一的に説明するものではないと考えられる。

本稿では、金（2017）の進行を止めることによって変える「まあ」という見解に着目し、この観点から「まあ」の意味を捉える。そして、それにより、「留保」説、「優越性」説、大工原（2010）の「強調的用法」の解釈のいずれの見解も整合的に取り入れた統一的な意味解釈を提案する。

4. 「まあ」の意味

4.1. 「まあ」の意味と分類

金（2017）は、(1) のような「なだめの用法」を「まあ」のプロトタイプ的用法とし、「まあ」を「とりあえずの代替案を提出するために、進行するものを止めること」とする。これをまず出発点として考える。このうち「とりあえずの代替案を提出するために」という目的の部分は、

「強調的用法」や断定の「まあ」の解釈には不十分であるため、除外する。

次の「進行するもの」だが、金（2017）ではこれが何かについて十分に議論されてはいない。これをなんらかの「プロセス」とし、このプロセスの性質について考える。このプロセスは「なだめの用法」においては他者の行為となっている。また、談話の「まあ」では「進行するもの」とは談話自体である。談話とは話し手と聞き手によって成立するものであるから、これを話し手と他者がともに関与するプロセスと捉えることができる。「なだめの用法」においても、なだめの「まあ」は、話し手が自分の眼の前で進行している他者のプロセスを制止しようとするものだから、このプロセスにも話し手が関与していると考えることができる。

さらに、このプロセスと「まあ」（およびこれに続く発話）との関係だが、「なだめの用法」の「まあ」においても、談話の「まあ」においても、このプロセスは「まあ」の発話に先立って進行している。

そこで、「まあ」によって止められるプロセスとは、話し手と他者がともに参与し、なおかつ発話に先立って進行しているプロセスであると、考えられる。

次に「止めること」自体であるが、この制止はまず、場合によっては手振りなどが加わることもあろうが、「まあ」から始まる発話全体によってなされる行為である（ここで、「まあ」によって始まり、制止という行為を遂行する発話を「まあ」発話と呼ぶことにする）。さらに「まあ」発話は談話を制止するだけでなく、これによって新たな談話が始まることもある。すなわち「まあ」発話は、先行するプロセスを打ち切って新たにプロセスを始めるという転換機能を持つ。そこでこの転換機能によって「まあ」発話の内容が規定される。つまり、先行するプロセスを打ち切って新たにプロセスを始めるような内容だけが「まあ」発話となりうる。

「まあ」発話によって打ち切られるプロセスは、話し手だけでなく他者も参与している（と少なくとも話し手が認識している[8]）ものであるが、この打ち切り（と転換）自体は話し手が、他者とはかかわりなく、自らの判断において、自らの権利として一方的に行うものである。

上記から、ここで「まあ」の意味を次のようにまとめることができる。

(18) 「まあ」の意味：「まあ」は、話し手と他者がともに関与し、なおかつすでに進行しているあるプロセスの存在を前提とし、話し手は自らの判断で、「まあ」に続く発話（「まあ」発話）によって、そのプロセスを打ち切るような新たなプロセスを開始する。このことから「まあ」発話の内容が規定される。すなわち、それは、話し手の判断と関連を持ち、また、そのようなプロセスの打ち切り（と転換）を可能にするものでなくてはならない。

このプロセスの生起する場は、話し手にとっての外界（現実世界）、話し手の内面、談話そのものの 3 つに分けられる。外界では問題となるプロセスは、「話し手の目の前で他者が行う行為のプロセス」である。話し手の内面のプロセスはさらに 2 つに分けられる。「話し手が他者

[8] それゆえ、実際に聞き手が存在しない独り言においても「まあ」は現れうる。なお、独り言の「まあ」については富樫（2002: 21）を参照されたい。

と共有している思考のプロセス」とプロセスが空間的に認識された「話し手が他者と共有している認識」である。そして談話においては発話の継起によって形成される「談話のプロセス」である。これらの 4 つのプロセスは、外界・内面・談話の順に抽象的なものになる。

この 4 つのプロセスのタイプに応じて、「まあ」の用法は、「なだめ」「ぼかし」「断定」「談話の転換」に分類できる。これらは、冒頭の (1) 〜 (4) にそれぞれ対応する。

(19) 「まあ」の制止・転換するプロセスのタイプと用法

a. 話し手の目の前で他者が行う行為のプロセス（なだめの用法、4.2 節、(1) に対応）

b. 話し手が他者と共有している思考のプロセス（ぼかしの用法、4.3 節、(2) に対応）

c. 話し手が他者と共有している認識（断定の用法、4.4 節、(3) に対応）

d. 談話のプロセス（談話の転換用法、4.5 節、(4) に対応）

以下、このそれぞれについて、順に検討をおこなう。

4.2. なだめの用法

(19a) のなだめの用法は、「まあ」の制止するプロセスが、話し手の目の前で他者が行う行為のプロセスの場合である。「なだめ」の例として金（2017: 44）は次のような 2 つの例を挙げている。

(20) 〈興奮している相手に向かって〉

<u>まあ</u>、落ち着いてください。

（大工原 2010:129 の例の、金 2017: 44 による引用にもとづく）

(21) 〈話が長く続く場面で〉

<u>まあ</u>、話の続きは、今度会ったときにでも。

（大工原 2010:146 の例の、金 2017: 44 による引用・解釈にもとづく）

(20) においては話し手の目の前で他者が行う行為のプロセスとは、目の前にいる相手が興奮状態を継続してる過程であり、話し手は「まあ」発話で、これを制止し、「落ち着かせる」という新たなプロセスを開始している。また (21) の話し手の目の前で他者が行っているのは、語りという行為であり、話し手は「まあ」発話で、相手の話を打ち切り、提案という新たなプロセスを始めている。

冒頭に挙げた (1) もここに含まれる。ここでは医者は、検査の結果を知りたがる相手の動きを「まあ」発話によって制止し、「待つ」という別のプロセスに転換しようとしている。

ここで (1) の例において、「まあ」のない場合を考えてみる。

(22) 「PETCT の結果はどうなんですか？」と聞くと、「待てや」と。

(22) は、医者が、自分が結果を伝えるまで「待て」と言っているとも、検査の結果が出るまで「待て」と言っているとも、あるいはそれ以外の何か（例えば医者が他の仕事にかかりきりでそれが終わるまで「(話しかけるのを) 待てや」と言っている）とも解釈できる。これに対し、(1) では、「まあ」によって、「患者が検査の結果を知りたがっている」気持ちの継続という、先行するプロセスが前提とされるため、医者が制止しているのがこのプロセスであること、すなわち、自分が結果を伝えるまで「待て」と求めていることがはっきりとわかる。

4.3. ぼかしの用法

ここでは (19b) のぼかしの用法を扱う。この用法においては、「まあ」の制止するプロセスは、話し手が他者と共有している思考のプロセスである。これは話し手がある思考を突き詰めずに途中で打ち切るため、「とりあえず」の印象、曖昧性、発話の和らげ、あるいは「内心のわだかまり」といった、「2.1. 「留保」説」で扱ったさまざまな含みが生じる。ここでは意味を突き詰めないという意味で「ぼかし」と総称する。

話し手が他者と共有している思考プロセスには少なくとも 2 種のものがありうる。ひとつは客観的な事実確定のプロセスであり、典型的には計算処理が挙げられる（すでに述べたようにこれに着目したのは富樫 2002 である）。計算自体は客観的なものであり、話し手の主観によって左右されるものではない。それゆえ、計算処理は、話し手にとって他者と共有しうる思考プロセスとして捉えられることになる。

(5) 1980 円に消費税だから、まあ、2100 円くらいかな。 （富樫 2002: 16）

この (5) のような例で「まあ」が用いられるのは、計算処理という思考プロセスの進行を制止し、計算処理を最後まで行なっていたら算出されていたであろう客観的な数値の代わりに、話し手が大雑把に判断した数値を導入しているからである。

客観的な事実確定のプロセスには、(7) のような例も含まれる。(7) では、「明るいか、暗いかは、客観的に判定しうるが、それを確定する過程はさておき、少なくとも自分にとっては明るい」と主観的な判断が述べられている。

もうひとつの思考プロセスのタイプとしては、思考においてさまざまな選択肢が生じ、もっとも妥当な選択肢の確定作業が行われている場合である（上述の小出 2009: 19 の引用である (8) も参照されたい）。この場合、他者にも同じような選択肢の生成と確定作業が行われていることが前提とされており、「まあ」は、話し手と他者が関与しているこの選択肢の確定作業を、「まあ」発話によって話し手の主観的な判断を導入することで制止している。典型的には (2) の「まあ、大丈夫だよ。」であり、これは「大丈夫かどうかについては私とあなたの間でいろいろ考えられるが、それを確定する過程はさておき、私としては大丈夫である」と述べるものである。また、(9) の「日本で、リンゴといったら、まあ青森ですよ。」も同様に「リンゴの名産地には私とあなたの間で長野や岩手などいろいろな可能性を挙げることができるが、それを確定

する過程はさておき、少なくとも自分にとっては青森だ」という主観的判断が「まあ」を通じて述べられている。

ここで、(7) の例において、「まあ」の存在しない場合を検討する。

(23) X：君の部屋は明るい？
　　Y：明るいよ。

(23) では、(7) に見られたような「明るいか、暗いか」についての客観的判定作業が前提とされないため、Y の返答からは「自分にとって」という主観的判断を読み取ることはできない。

(24) a. いちおう修理はしたんだけど、まあ、大丈夫かな。（作例）
　　b. いちおう修理はしたんだけど、大丈夫かな。（作例）

また (24a) は、「自分の行なった修理については客観的に見れば問題点はあるかもしれないが、それを確定する過程はさておいて、自分としては問題ないと思う」ということを述べている。これに対し (24b)では「まあ」が存在しないことにより「自分の行なった修理にはもしかしたら問題点があるかもしれない」と、確定する過程は制止されていないため、「（修理の出来具合については）不安である」と、(24a) とは逆の意味になっている。

4.4. 断定の用法

「まあ」は、話し手と他者の共有するプロセスの進行を制止・転換する「まあ」発話を導入するさいに用いられる。ここでは、「話し手と他者の共有するプロセス」と「まあ」発話の関係は、後者に対して前者が先行するというように時間的関係として捉えられている。この時間的関係は、「（先に進行して広がっているため）より広がったもの」に対して「（後発のため）より小さいもの」というように空間的にも捉えることができる。

そこで、「話し手と他者の共有するプロセス」を、すでに広まり定着した前提や一般的な認識、これに対して「まあ」発話はその前提を覆すような主張・提案、あるいは、一般的な認識とは異なる意見や判断という捉え方が生じる。

これが (19c) の断定の用法であり、この用法においては、話し手と他者が共有している認識に対して、話し手は「まあ」発話によって話し手個人の見解を断定的に述べることとなる。

まず「前提」と「前提の覆し」の例としては (11) が挙げられる。ここでは「〈黒い塊の正体〉に関心を持つべきだという A のもつ前提」を B が覆す提案をしていると、解釈することができる。また、(25) もまた「先行する発話が真である」という前提を覆すものとなっている。

(25) まあ、冗談だけど。（柳澤・馮 2021b: 235）

話し手と他者が共有しているのが「一般的な認識」である場合、「まあ」には、これに対する反論や、個人的な主張が後続する。ここには 3.4 節で扱った断定の「まあ」が含まれる。

(3) は「首位攻防戦」と一般的には認識されているが、自分の気持ちとしては「初戦」である、と反論し、(4) の「まあまあ、でも、それでもまあまあ」では、「ホテルには人が少ない（ゆえに寂しい）」という一般的な認識に対して、話し手は「（プラーベートプールなどがあって）すごかった」と反対意見を述べている。

ここで、(3) の例で、「まあ」を除くと（「初戦ということよね。」）、「まあ」の表していた一般的な認識との対比関係が示されないため、個人的な反論の意味合いが失われる。

(14) は「この作品は狩野派であることは間違いなく、また狩野派の最盛期は江戸中期までであると一般的に考えられており、それゆえ、この作品も江戸中期のものとする見立ても存在する」という背景となる認識を前提とした上で、「しかし、私の鑑定によれば、幕末か明治の作品のどちらかだろう」と断定しているものと考えられる[9]。

同様に、3.4 節の「強調的用法」（大工原 2010）の「まぁー」もここに含まれる。本稿では「強調的用法」の「まぁー」は、話し手の次のような状況認識にもとづくと考える。

(26) 問題となる事柄と話し手との関係を他者が想定していない状況に対して、話し手が問題となる事柄について個人的な体験があることを示し、その感想を述べる。

「強制的用法」について、大工原（2010: 160）は過去の「体験談」「個人的体験」を語るものと指摘するが、これに加えて、話し手の体験を聞き手が知らない、という状況が前提となっているのもこの用法では重要である。

そこで、(26) について検討しよう。例えば、(27) のような発話が発せられる状況を考える（以下、(27) から (30) まで作例）。

(27) （前の晩の集まりについて）昨日はまぁー楽しかった！

(27) は話し手が「前の晩の集まり」に参加したことを知らない人に対するものとしては自然だが、その集まりでともに時間を過ごした人に対して言ったものとすると、やや不自然なものとなる。また、(28) のように、B が「前の晩の集まり」に参加したことを A が知っている状況でも、不自然となる。

(28) A：昨日の集まりはどうだった？
B：？昨日はまぁー楽しかった！

[9] ただし、(14) を「この作品は狩野派であることは間違いないものの、その時期については専門家の間では議論の余地がある。しかし、その議論は突き詰めずに私の判断を述べれば幕末か明治の作品だろう」と解釈すれば、ぼかしの用法となる。文脈がわからない以上、今のところはどちらかは決めがたい。

ただし、ここで A の知らない情報が付加されると、自然になる（例は大工原 2010: 159 の (8.102) を参考にした）。

(29) A：昨日の集まりはどうだった？
　　B：昨日は、ゲームをやったんだけど、それがまぁー楽しかった！

次のようにそもそも B と「前の晩の集まり」の関係が前提とされていない状況もまた自然である。

(30) （A と C が前の晩に開催されたという集まりについて話している。それを側から聞きつけた B が会話に入る）
　　B：え、なになに、昨日のこと？　昨日はまぁー楽しかったよ。
　　A：え、行ったの？　どんなだったの？

このように、「強制的用法」の「まぁー」では、話題になっている事柄と話し手の関連を聞き手が想定していない（と話し手がみなしている）状況が前提となっている。しかしながら、この前提に反して、実際には話し手はその事柄をなんらかの形で経験している。「まあ」発話は、その経験によってもたらされた話し手個人の感想や評価を述べものであるが、それによって、そのような個人的な経験の存在が示唆されるのである。

そこで、(26) のような観点から、(12b) と (13) をあらためて捉えると、(12b) では、話し手とリンゴの関係は不明であるものの、話し手が自分と青森のリンゴとの関係を想定していない聞き手に対して「青森のリンゴは一番」という個人的体験にもとづく確信を述べたものと考えられる。(13) も発話状況は不明であるが、話し手がこの芝居を見たということを知らない人々に、話し手はその芝居を見たうえでの感想を述べているものと思われる。

4.5. 談話の転換用法

次に (19d) の談話の転換用法を検討する。これは、「まあ」によって、談話のプロセスを制止する場合である。この用法においては、(15) 〜 (17) の諸例で見たように、「まあ」発話によって、談話のプロセスを制止し、新たなプロセスとなる注釈・例示・見解表示・引用が導入・挿入される。また (4) での「(ほんで) まあ」のように新たな話題の導入もなされる。この「まあ」は、それまでの談話の進行の制止と転換の標識となっていると考えられ、談話を分節する機能を果たしている。

談話は、話し手が自分で生成するものであるが、そのいっぽう 2 つの側面で他者の存在が前提とされている。これは、談話は常になんらかの聞き手の存在を前提とし、その聞き手との共同作業によって成立するものだからである（この聞き手はもう一人の話し手である場合もあるし、単に想定されているに過ぎない場合もある）。

4.6. 「留保」説と「優越性」説の対立について

「留保」説は、「まあ」を発話の和らげ、曖昧性、話し手への配慮などと関連づけるが、柳澤・馮の「優越性」説は「まあ」の出現条件は話し手の「優越性」にあるとする。それゆえ、「留保」説と「優越性」説は相容れないようにみえるが、本稿は (18) に述べた「まあ」の意味から、この双方の見解がどちらも事実の一面を捉えていることを示す。

まず、「まあ」が発話の和らげ、曖昧性、話し手への配慮などを表すのは 4.3 節で扱ったぼかしの用法である。この場合、話し手は、客観的な事実確定のプロセスや、もっとも妥当な選択肢の確定を制止し、新たに主観的な判断を導入する。すなわち、明確な結論を出すことを途中で放棄し、そのうえで、主観的な判断を述べるということになるため、暫定性、曖昧性、はっきりと結論づけないという意味での発話の和らげや謙遜といったニュアンスが生じるものと考えられる。

いっぽう、話し手の「優越性」が強くかかわるのは、4.4 節の断定の用法で取り上げた諸例である。ここに含まれる用法は、「まあ」によって前提や一般的な認識と対立する主観的な意見・判断を述べるものとなっている。すなわち、すでに前提となっている事柄や一般的な通念にあらがって個人的な意見を述べることとなり、これが「優越性」「尊大」などのニュアンスに結びついていると考えられる。

また、4.2 節のなだめの用法では触れなかったが、目の前の他者の行為に対する制止が「尊大さ」あるいは「社会的優位性」にかかわることがある。

(31) まあ、そろそろ終わりにしようか。 （柳澤・馮 2021a: 15）

この発話が適切なものとなるのは「終了を宣言できるリーダーに限られる」（柳澤・馮 2021a: 15）が、これは、目の前の事態である「人々が仕事を行うプロセス」を制止・転換できるのは、当然のことながら、その権限を持った人でなくてはならないからである。それゆえ、そうした人以外の発する「まあ」は不自然な印象をともなうこととなる。

5. まとめと課題

本稿は、先行研究を踏まえ、その成果にもとづき、「まあ」に関する統一的な意味解釈を提出し、その検討をおこなった。

本稿の考える「まあ」の意味とは次のようなものである。

(18) 「まあ」の意味：「まあ」は、話し手と他者がともに関与し、なおかつすでに進行しているあるプロセスの存在を前提とし、話し手は自らの判断で、「まあ」に続く発話（「まあ」発話）によって、そのプロセスを打ち切るような新たなプロセスを開始する。このことから「まあ」発話の内容が規定される。すなわち、それは、話し手の判断と関連を持ち、また、そのようなプロセスの打ち切り（と転換）を可能にするものでなくてはならない。

このプロセスには 4 つのタイプがあり、それぞれのプロセスのタイプに応じて「まあ」の用法は「なだめ」「ぼかし」「断定」「談話の転換」に分類することができる。

(18) で示したように、「まあ」の出現の鍵となるのは、「話し手と他者がともに関与し、なおかつ発話に先立って進行しているあるプロセスが存在」しているという、話し手の事態認識である。話し手がこのような事態認識を持ち、さらにそのプロセスに介入する必要があると判断したときに、「まあ」は出現する、と考えられる。

本稿では「まあ」の用法のすべてについて、論ずることはできなかった[10]。したがって、本稿の提出した解釈には更なる検討が必要である。また、本稿では論じなかった感動詞の「まあ」の適切な位置づけも今後の課題となろう。

参考文献

加藤重広 (2001)「照応現象として見た逆接: 「しかし」の用法を中心に」『富山大学人文学部紀要』34. 47-78.

川上恭子 (1993)「談話における『まあ』の用法と機能（一）— 応答型用法の分類 —」『園田国文』14, 69-79.

川上恭子 (1994)「談話における『まあ』の用法と機能（二）— 展開型別法の分類 —」『園田国文』15, 69-79.

川田拓也 (2007a)「日本語談話における『まあ』の役割と機能について」南雅彦(編), 『言語学と日本語教育 V』175-192, 東京: くろしお出版.

川田拓也 (2007b)「「まあ」のスケール作用性—副詞的用法と談話的機能の統合に向けて」『語用論研究』9, 37-52. 日本語用論学会.

魏春娥 (2015)「談話におけるフィラー「ま（ー）」の待遇差に関する予備的考察」Journal of East Asian Studies, 13, 75-93.

金聖実 (2017)「日本語と韓国語のフィラーの対照研究 ：「まあ」と「뭐」を中心に」『さいたま言語研究』1, 40-50.

小出慶一 (2009)「現代日本語の意味・用法の広が゛りに関する記述的研究 — 多機能化，フィラー，フィラー化—」『日本・アシ゛ア研究』6, 1-37.

大工原勇人 (2010)「日本語教育におけるフィラーの 指導のための基礎的研究:フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて」神戸大学博士学位論文.

冨樫純一 (2002)「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7, 15-31.

柳澤浩哉, 馮文彦 (2019)「大学講義における「まあ」」『広島大学日本語教育研究』29, 9-16.

柳澤浩哉, 馮文彦 (2021a)「フィラー「まあ」の意味を考える」『広島大学日本語教育研究』31, 10-16.

柳澤浩哉, 馮文彦 (2021b) 「「まあ」の意味と機能」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要

[10] たとえば、話を切り上げる「まあね」。

教育学研究』2, 232-241.
Lukamto, Yuliana Rejeki (2012)「日本語における談話標識について：日本語教育の観点から」大阪大学博士学位論文.

Stopping the Process: the Meaning of *maa* in Japanese

KUMAKIRI Taku
takukumakiri@icloud.com

Keywords: Japanese, discourse marker, filler, semantics

Abstract

This paper focuses on the particle *maa* which has various usages in the discourse of Japanese. After examining previous studies, the author proposes a common basis of these usages. It is an ongoing process in which both the speaker and a listener (or others) take part. When the speaker wants to stop this process, *maa* introduces an utterance in order to stop this process and start new one. According to the types of this process, the meaning of *maa* is divided into four usages: the *maa* of soothing, the *maa* of blurring, the assertive *maa* and the *maa* of the discourse structure.

（くまきり・たく　東京大学大学院人文社会系研究科研究員）